松原市文化財報告　第３冊

松原市内遺跡群1

民間開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

岡 遺 跡 E7−4−83区

丹南遺跡 E8−4−47区

布忍遺跡 C5−3−58区

松原市教育委員会

2019.03

例　言

1. 本書は、松原市教育委員会が依頼を受け平成29年度～30年度に以下のとおり実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

調査区名	調査依頼者	発掘原因/敷地面積	所在地（地番）	発掘・整理作業受託者	調査担当者
岡遺跡 E7-4-83区	クローバーホーム株式会社	宅地造成（住宅13戸及び位置指定道路）/2302.52㎡	松原市柴垣1丁目823-9の一部,741-2,-3,岡3丁目739-1,-2の一部,743-4,-5,-6,-7,里道敷	株式会社アート	樫木 規秀
丹南遺跡 E8-4-47区	富士エンジニアリング株式会社	宅地造成（住宅8戸及び位置指定道路）/1005.07㎡	松原市丹南4丁目173-1,-3,182-6	株式会社アート	大矢 祐司
布忍遺跡 C5-3-58区	スギホールディングス株式会社	店舗/2253.58㎡	松原市南新町1丁目86-2,-4,-6,-8,87-2,-7	安西工業株式会社	樫木 規秀

2. 発掘調査及び整理作業にかかる費用は、各調査依頼者が負担した。
3. 本書の執筆は調査担当者が行い、編集は大矢が行った。
4. 本書で用いた座標値は、すべて世界測地系による平面直角座標系第Ⅵ系の数値で、m単位で表記した。また、水準値は東京湾平均海面を基準とする海抜高で表した。
5. 地層の土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版 標準土色帖』34版2011.8（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）を用いて目視により比定した。
6. 発掘した遺構は、検出順にアラビア数字で通し番号をつけ、その後ろに遺構の種類を文字で付した（例：1土坑）。また、複数の遺構の組み合わせからなる遺構については、遺構の種類ごとにアラビア数字で通し番号をつけ、遺構の種類名の後ろに付した（例：掘立柱建物1）。
7. 遺物の実測図は、須恵器の断面を黒色、瓦・瓦器・瓦質土器の断面を灰色で塗り表現した。
8. 出土遺物の整理作業を実施するにあたり、下記の文献を参考とした。

大阪府立近つ飛鳥博物館編 2006 『年代のものさし－陶邑の須恵器』大阪府立近つ飛鳥博物館図録40
古代の土器研究会編 1992 『古代の土器1　都城の土器集成』
寺沢　薫・森井貞雄 1989 「河内地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ　木耳社
中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』　真陽社
中世土器研究会事務局 2015 「東播系須恵器鉢の分類と編年」『中近世土器の基礎研究』26

9. 調査の実施にあたっては、調査依頼者及び代理人の皆様にご協力を得た。また、整理作業について古谷眞由美氏、三好孝一氏にご教示を賜った。記して謝意を表したい。

10. 発掘調査に伴う遺物及び図面・写真などの記録類は、全て松原市教育委員会が保管している。

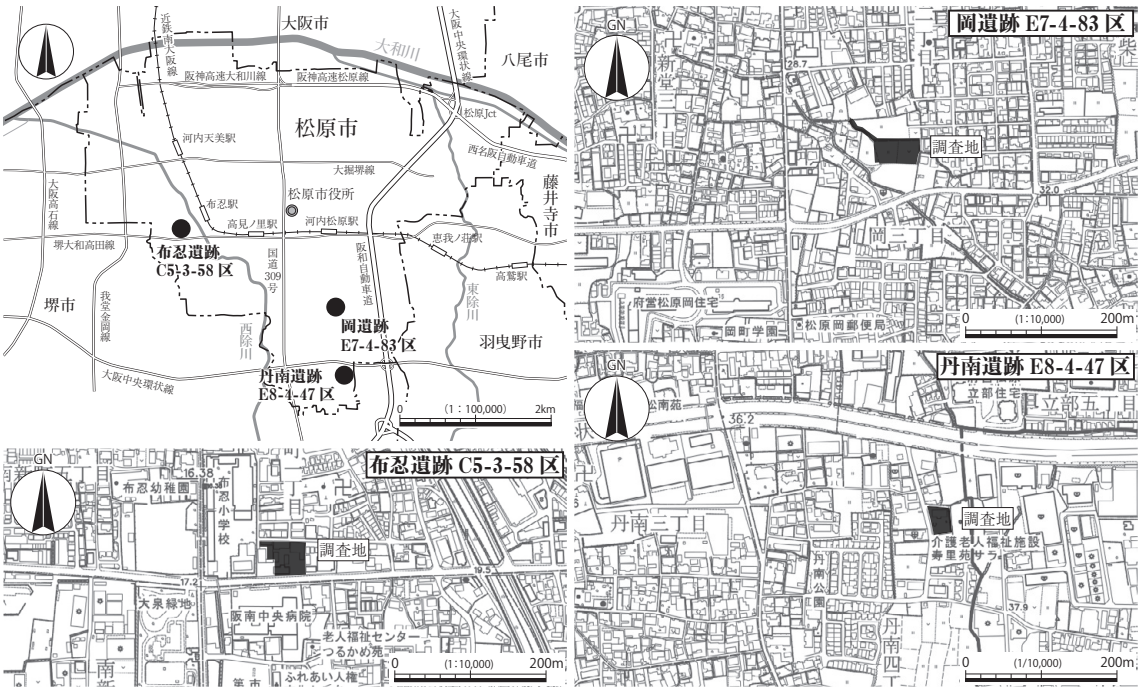


図1　発掘調査位置図　1：10000

岡遺跡 E7－4－83区

1　調査に至る経緯と経過

本調査は、クローバーホーム株式会社により宅地造成工事が計画されたことによる。平成29年12月４日付けで発掘の届出が提出され、平成30年２月26日に道路部分を対象として確認調査を実施したところ、一部において古墳時代～古代の遺構・遺物と中世の遺物を確認した。このため、事業者と協議を行い、埋蔵文化財が影響を受ける範囲（246㎡）について、記録保存調査を実施することとなった。

発掘調査は、事業の進捗に合わせて、Ａ区とＢ区に分け、このうち、Ａ区については更にAa区・Ab区・Ac区に細分した。現地調査は平成30年４月９日から５月15日まで実施した。整理調査は、現地調査終了後から開始し、平成31年３月31日付けで本報告書の刊行をもって終了した。

2　位置と環境

岡遺跡は、松原市柴垣１丁目、岡２丁目～５丁目に所在する旧石器時代～近世にかけての複合遺跡である。同遺跡は、羽曳野丘陵からのびる洪積段丘や沖積段丘上に立地しているが、この段丘の中には開析谷も存在する。本調査地は、段丘の縁辺部～開析谷にあたり、小字名「東谷」に位置する。

これまでの岡遺跡の調査については、本調査区の南西約300mの地点で行われた府営松原岡住宅の建て替えに伴う大阪府教育委員会の調査で、溶解炉及び鋳型、炉壁など、平安時代末～室町時代にかけての河内鋳物師に関連する生産遺構・遺物等が確認されている。

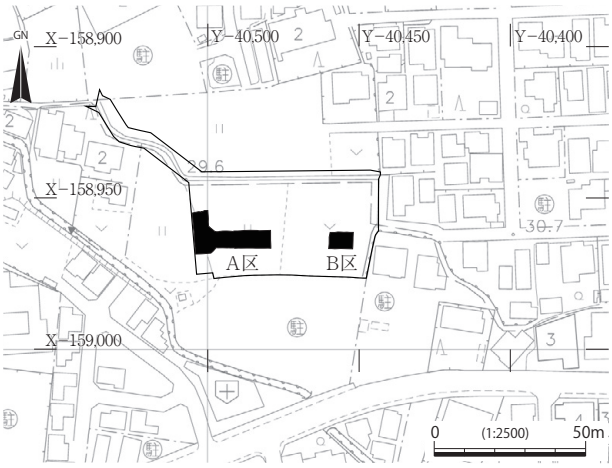


図２　調査区配置図　１：2500

3　基本層序

基本層序は、Ａ区西部は段丘の縁辺部にあたり、遺構面（地山）である黄橙色微細砂は耕土直下に所在し、標高約29.4mである。それ以外の地点は段丘下の谷状地形内に位置するため、層序は、盛土、床土、灰白色系粘土、橙色中砂～細砂、遺構面である黄橙色細砂混粘土となり、標高約28.7～28.9mが検出面である。

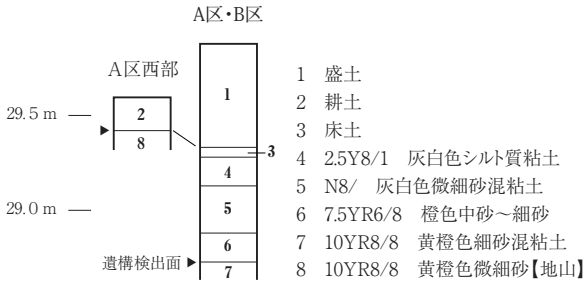


図3　基本土層柱状模式図　１：40

4　検出遺構（図４～８）

検出した遺構は、溝２条、井戸２基、土坑３基、ピット６基、落ち込み１基、河道３条であった。ここでは、検出した遺構を種別ごとに記述する。

【溝・井戸・土坑】（図５）

１溝　Ａ区南西隅で検出した検出長約５ｍ、幅0.8～1.1m、深さ0.2ｍの溝である。埋土は、にぶい黄橙色微細砂、同細砂混粘土であった。南東から北西方向にのびる。４井戸によって切られている。出土遺物には９世紀前半とみられる須恵器(1)がある。

６溝　Ａ区西部で検出した遺構で、平均幅0.5～0.6m、検出長約6.4m、深さ0.1mをはかる。埋土は灰白色微細砂であった。４井戸によって切られ、５落ち込みを切っている。当遺構からは須恵器壺の底部(2)が出土している。

４井戸　Ａ区西部で検出した井戸で、直径約1.9m、深さ3.7m以上をはかる。埋土は、灰色及び灰白色系粘土である。６溝・５落ち込み・７井戸を切っている。土師器の擂鉢等(6・7)が出土している。

７井戸　Ａ区西部で検出した井戸で、南北長約2.4m、東西検出長約2.8m、深さ1.4mの井戸である。埋土の上層は、灰色～灰白色系中砂～粘土で、下層は褐色系粘土が主体である。１溝を切るが、４井戸によって切られる。埋土中から瓦器椀・土師器皿(3～5)や最下層から曲物が出土した。出土遺物の年代から14紀前半には、ある程度埋没していたとみられる。

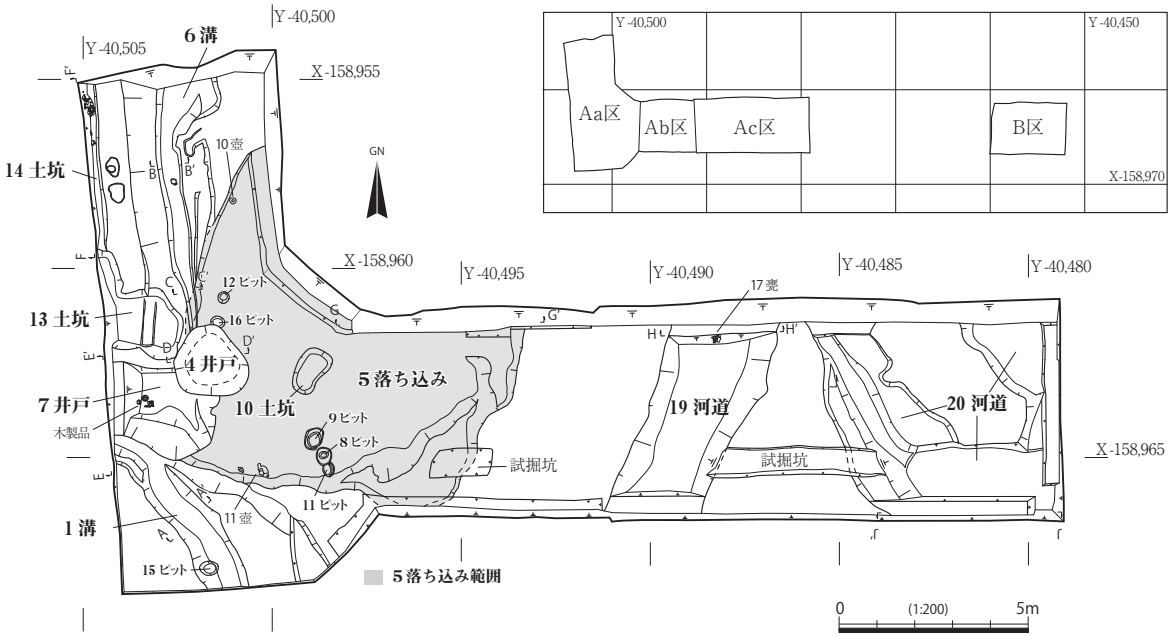
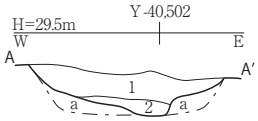
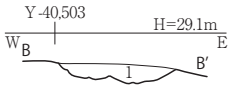


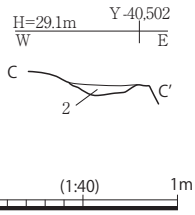
図４　A区遺構平面図　1：200

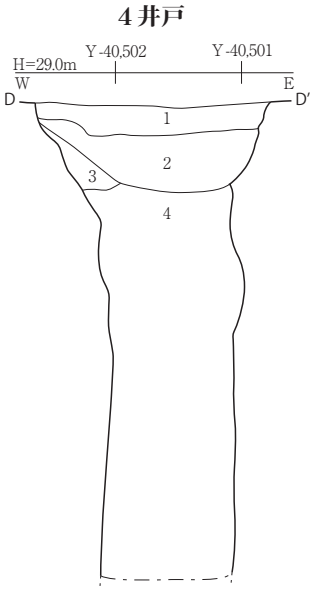


1　10YR7/2　にぶい黄橙色微細砂
（φ1 ～ 5mm 大の礫含む、鉄分沈着）
2　10YR7/2　にぶい黄橙色細砂混粘土
a　10YR8/8　黄橙色シルト

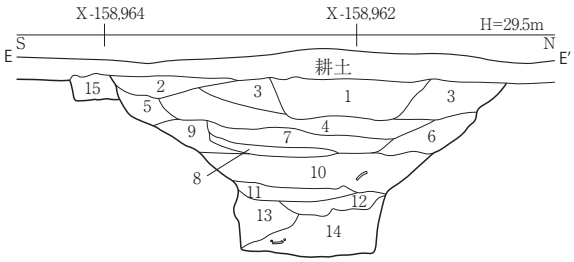


1　10YR8/1　灰白色微細砂
2　10YR8/1　灰白色微細砂
（φ1 ～ 5mm 大の礫含む）

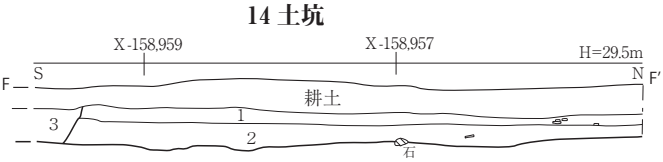




1　7.5YR8/1　灰白色粘土（赤褐色粗砂含む）
2　7.5Y5/1　灰色粘土
3　7.5Y6/1　灰色粗砂混粘土
4　7.5Y5/1　灰色シルト質粘土（2 より粘性強い、植物遺存体含む）



1　10YR6/1　褐灰色微細砂
（φ1 ～ 3cm 大の礫含む、鉄分沈着、よくしまる）
2　10YR7/1　灰白色微細砂（鉄分沈着）
3　5Y6/1　灰色細砂
4　10YR7/1　灰白色微細砂
5　10YR7/1　灰白色シルト質粘土
6　N8/　灰白色粘土
7　7.5Y8/1　灰白色中砂～細砂（鉄分沈着）
8　10YR7/1　灰白色粘土
9　N8/　灰白色微細砂混粘土
10　10YR6/1　褐灰色粘土 (土器含む)
11　10YR6/1　褐灰色シルト質粘土
12　10YR5/1　褐灰色細砂混粘土
13　5B7/1　明青灰色細礫
14　10YR5/1　褐灰色粘土（木製品含む）
15　10YR7/2　にぶい黄橙色微細砂［1溝埋土］



1　10YR7/3　にぶい黄橙色微細砂 (土器含む)
2　10YR8/3　浅黄橙色微細砂混粘土 (土器含む)
3　10YR7/2　にぶい黄橙色微細砂 (φ3 ～ 5cm 程度の礫含む)［13 土坑埋土］

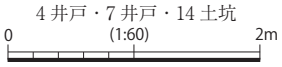


図５　1溝・6溝・4井戸・7井戸・14土坑断面図　1：40（4井戸・7井戸・14土坑のみ 1：60）

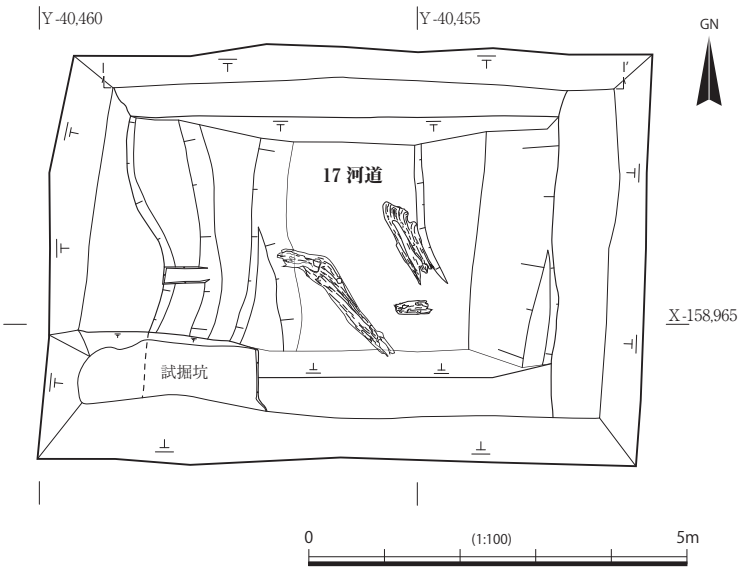
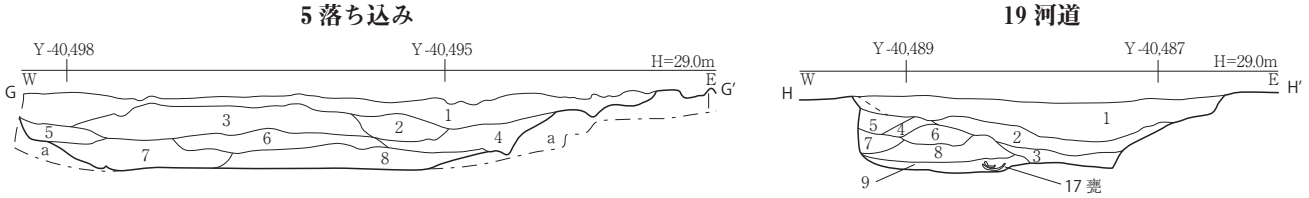
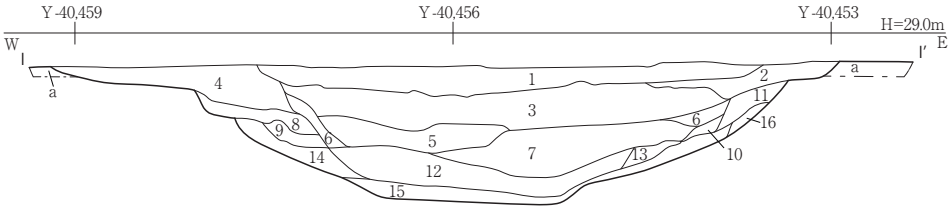


図６　B区遺構平面図　１：100



1　10YR7/8　黄橙色微細砂混 10YR4/1　褐灰色微細砂
2　10YR6/1　褐灰色細砂
3　7.5YR8/1　灰白色細砂（炭含む、鉄分沈着）
4　10YR7/1　灰白色微細砂
5　10YR8/1　灰白色微細砂
6　5Y8/1　灰白色細砂
7　10YR7/2　にぶい黄橙色細砂～微細砂
8　2.5Y8/1　灰白色粗砂～中砂
a　10YR8/8　黄橙色微細砂（若干粘性あり）

1　5YR4/1　褐灰色微細砂（よくしまる）
2　5YR6/1　褐灰色微細砂混粘土
3　7.5YR6/1　褐灰色中礫～粗砂
4　5YR8/2　灰白色中砂～細砂
5　5YR7/1　明褐灰色細砂
6　N8/　灰白色細礫～粗砂
7　5YR6/1　褐灰色細砂
8　10YR7/1　灰白色中～細砂
9　10YR8/1　灰白色中砂（土器含む）



1　5YR7/6 ～ 5YR5/6　橙色～明赤褐色微細砂（よくしまる）
2　5YR4/1　褐灰色細砂
3　7.5YR7/1　明褐灰色細砂～微細砂
　（一部、灰白色微細砂混、植物遺存体含む）
4　5YR4/1　褐灰色微細砂
　（下層は　7.5YR8/1　灰白色微細砂混）
5　7.5YR7/1　明褐灰色シルト質粘土（中礫～細礫含む）
6　7.5YR5/1　褐灰色シルト
7　5Y5/1　灰色粗砂～細砂混粘土
8　10YR7/1　灰白色細砂
9　7.5YR7/1　明褐灰色シルト質粘土
10　7.5Y6/1　褐灰色微細砂混粘土
11　10YR7/1　灰白色中砂～細砂
12　N6/　灰色粘土
13　N8/　灰白色シルト質粘土
14　7.5YR7/1　明褐灰色細砂
15　N5/　灰色粗砂～中砂
16　2.5Y7/1　灰白色中砂（10YR8/8 黄橙色細礫含む）
a　10YR8/8　黄橙色細砂混粘土

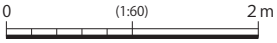


図７　５落ち込み・17河道・19河道断面図　１：60

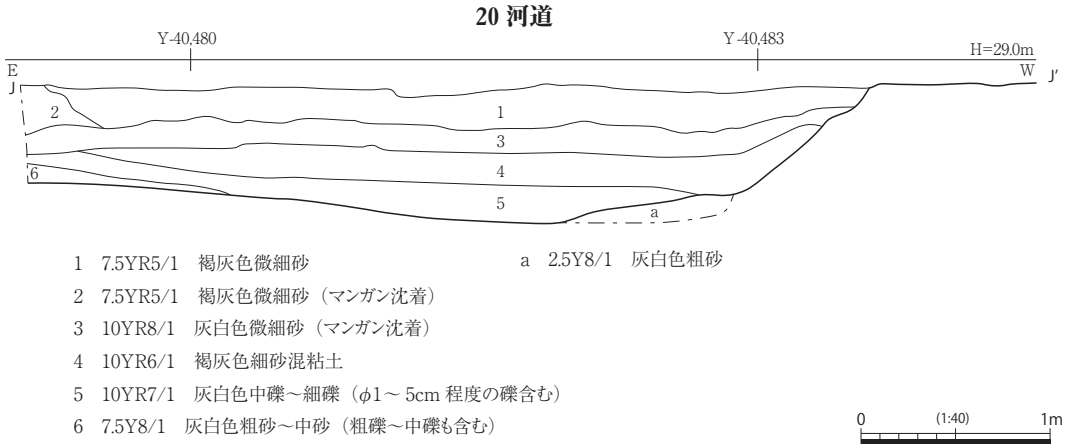


図８　20河道断面図　１：40

14土坑　　Ａ区北西端部で検出した遺構で、検出長軸4.4m、検出短軸0.3mをはかる。埋土の上層はにぶい黄橙色微細砂、下層は浅黄橙色微細砂混粘土であった。上層より８世紀前半～中頃とみられる土師器が出土した(８・９)。

【落ち込み・河道】（図７～８）

５落ち込み　　Ａ区中央部～西部にまたがる遺構で、南北検出長９ｍ、東西検出長８ｍ、深さ0.3～0.5mをはかる。埋土は褐色系微細砂、灰白色系の細砂～微細砂が主体であった。出土遺物(10～14)には弥生土器や奈良時代とみられる須恵器が含まれ、長期間存続していたようである。

17河道　　Ｂ区で検出した河道で、幅5.2～6.0m、検出長約4.5m、深さ約１ｍをはかる。埋土は、上層は褐色系細砂～微細砂、下層は灰色系粗砂～細砂及び灰色系粘土が主体であった。出土遺物には、弥生土器、土師器、須恵器があり、６世紀後半の須恵器杯蓋(15)が第12層の灰色粘土に含まれていたことから、完全に埋没したのはこれ以降とみられる。なお、この他自然木も確認した。

19河道　　Ａ区東部で検出した河道で、幅2.5～2.9m、検出長約５ｍ、深さ0.5～0.6mをはかる。埋土は、褐灰色系中礫～微細砂、灰白色系中砂～細砂が主体であった。当遺構からは弥生時代後期の土器(17)が出土している。

20河道　　Ａ区最東部で検出した河道で、途中で二手に分かれる。検出長約５ｍ、深さ約0.8～1.1mをはかる。埋土は褐色及び灰白色系の細砂～微細砂が主体だが、最下層は同色系の粗礫～中礫が混じる。第１層より、６世紀後半に帰属する須恵器の杯(16)が出土している。

５　出土遺物（図９～10）

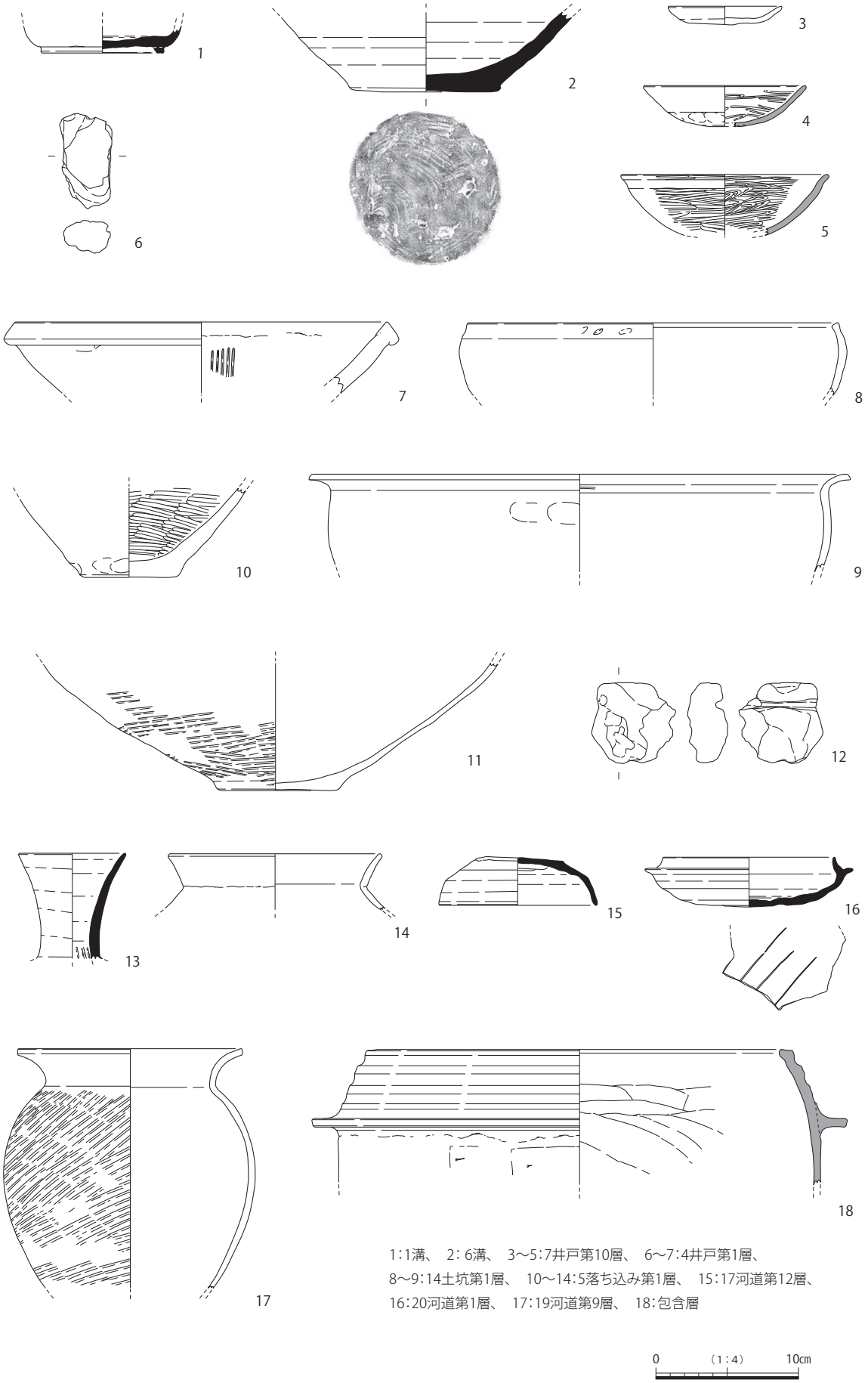
今回の調査では、コンテナ２箱分の遺物が出土した。内訳は、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、土製品、石製品、木製品であった。以下、出土遺物について遺構の種別ごとに記述する。

溝　　１は須恵器杯で、９世紀前半とみられる。２は、須恵器の壺である。底部には回転糸切痕が残る。

井戸　　３は、土師器皿で、底部から口縁部に向け、外反ぎみに立ち上がる。４・５は和泉型瓦器椀である。４は器高の浅い皿状を呈し、内面のヘラミガキは粗雑で、隙間があく。14世紀前半の年代が与えられる。５は口縁部が外反し、外面・内面ともヘラミガキが丁寧に施される。12世紀後半頃に比定される。６は炉壁の破片とみられる。7は土師器の擂鉢で、固く焼き締まっている。口縁部は上方と下方に肥厚する。内面には５条１単位のスリ目が施される。14世紀代とみられる。

土坑　　８は土師器の鉢で、口縁端部は内傾している。９は土師器の甕で、頸部から口縁端部にかけて外反する。これらは、8世紀前半～中頃に比定される。

落ち込み・河道　　10は弥生土器壺の底部で、内面に細かくヘラミガキを施す。外面は橙色だが、内面は黒褐色である。胎土には１～５mm程度の砂礫を大量に含む。弥生時代前期とみられる。11も弥生土器壺の底部で、底部から体部に向け、緩やかに立ち上がる。外面にタタキ痕が残る。弥生時代中期後半とみられる。12



1:1溝、 2:6溝、 3～5:7井戸第10層、 6～7:4井戸第1層、
8～9:14土坑第1層、 10～14:5落ち込み第1層、 15:17河道第12層、
16:20河道第1層、 17:19河道第9層、 18:包含層

図9　出土遺物実測図（1）　1：4

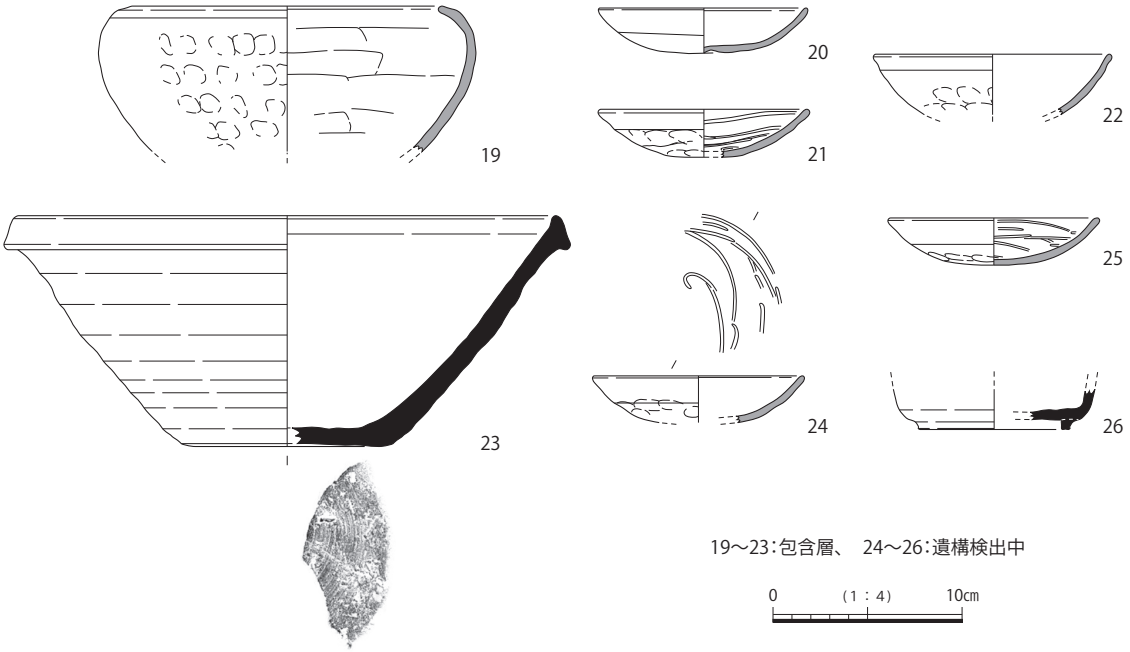


図10　出土遺物実測図（2）　1：4

は炉壁片である。13は須恵器壺の頸部である。頸部は緩やかに外反する。８世紀代の所産か。14は頸部がくの字状の土師器甕である。15は須恵器の杯蓋である。６世紀後半の年代が与えられる。16は須恵器の杯である。底部に３条の線刻がある。同じく６世紀後半の年代が与えられる。17は弥生土器の甕である。口頸部は緩やかに外反し、外面は斜方向にタタキが施される。内面の調整は磨滅のため確認できなかった。胎土には１～３㎜程度の砂粒を大量に含む。弥生時代後期に帰属する。

包含層　A区西部の段丘縁辺部で出土した（図３第４・５層）。18は瓦質羽釜である。14世紀中頃～後半の所産。19は瓦質浅鉢で、体部から口縁部に向け内湾している。外面には指頭圧痕、内面にヘラケズリの調整痕跡が残る。20～22は和泉型瓦器椀である。20・21は皿状の形態を呈す。20は磨滅のため、ヘラミガキの観察はできなかったが、21の内面には隙間の空いたヘラミガキが施される。14世紀前半に比定できる。22は半球状の体部をもつが、磨滅のため、ヘラミガキは観察できなかった。13世紀中頃とみられる。23は東播系須恵器鉢で、口縁端部は上方と下方に肥厚する。14世紀前半の年代が与えられる。

遺構検出中　24・25は和泉型瓦器椀で、ほぼ皿に近い形態を持ち、隙間が空いたヘラミガキが施される。14世紀前半の所産である。26は須恵器杯で、7世紀後半～8世紀前半頃に比定される。

6　総括

今回の調査で明らかになった点をまとめる。

A区・B区では本調査地の小字が「東谷」であることを裏付ける形で、谷状地形を確認した。この谷状地形内からは、５落ち込み及び17・19・20河道を検出した。上記の落ち込みや河道からの出土遺物には、弥生時代前期～後期や古墳時代後期のものがあり、付近に同時代の集落の存在が推測される。

この後、一旦人々の活動は途絶えるが、段丘の縁辺部であるA区西部で、８～９世紀に１・６溝、14土坑が形成されている。そして、再びの空白期間を挟み、同じくA区西部で、13～14世紀に７井戸・４井戸が所在する。これらの遺構は、集落の端部に位置していると考えられる。集落の中心は、地形的に一段高く安定していることから、A区西側の調査区外に所在するとみられる。

これ以降については、検出した遺構の最終埋没年代が14世紀代であること、包含層に含まれている遺物も14世紀前半を中心に、14世紀中頃～後半までにはおさまることから、詳細な時期は不明だが、14世紀後半（室町時代）以降に谷状地形を埋める地業がなされ、耕地化したとみられる。

なお、岡遺跡では、河内鋳物師関連の遺構・遺物も確認されているが、本調査では、４井戸より炉壁片が出土したのみであった。

参考文献

大阪府教育委員会 1993『岡2丁目所在遺跡発掘調査概要報告書』

図11　Aa区全景（北から）

図12　Aa・Ab区全景（南西から）

図13　Aa区北壁（南から）

図14　１溝断面（南東から）

図15　６溝①（北）断面（南から）

図16　４井戸断面(南から）

図17　７井戸断面（東から）

図18　Ac区全景(南から）

図19　５落ち込み断面（南から）

図20　19河道断面（南から）

図21　B区全景（南から）

図22　17河道断面（南から）

図23　出土遺物集合写真（１）

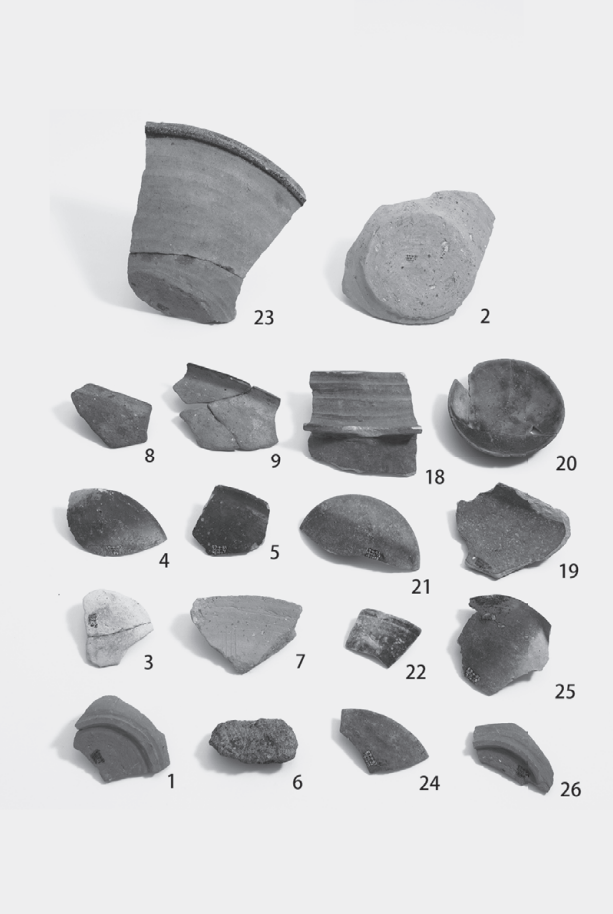


図24　出土遺物集合写真（２）

丹南遺跡 E8－4－47区

1　調査に至る経緯と経過

本調査は、富士エンジニアリング株式会社により宅地造成工事が計画されたことによる。平成30年４月５日に確認調査を実施し、遺構と遺物を確認した。そのため事業者と協議を行い、埋蔵文化財が影響を受ける位置指定道路部分（100㎡）について、記録保存調査を実施した。なお、宅地については建物基礎が盛土内におさまるため、確認調査を実施せず埋没保存の措置をとった。

調査は、現地調査を平成30年５月９日～23日に実施した。現地調査終了後に整理作業を開始し、本報告書刊行をもって全ての調査を終了した。

2　位置と環境

丹南遺跡は、松原市南端の丹南２～５丁目に所在する縄文時代～近世の複合遺跡である。近世は河内国丹南郡丹南村で、北側に高木氏の丹南藩陣屋趾と融通念佛宗寺院の来迎寺が所在する。また、遺跡中央に中高野街道が南北方向に通る。

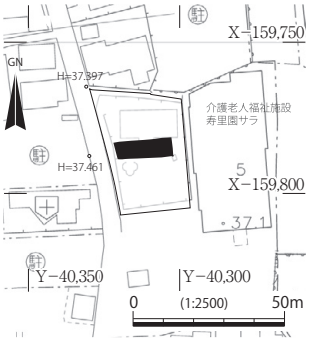


図25　調査区配置図　1：2500

遺跡は河内台地上に位置し、『5万分の1地質図幅「大阪南東部」』（1998, 地質調査所）では低位段丘上位(tl1)面で、来迎寺付近の崖より西が完新世の後背湿地である。

周辺の調査では、本調査地東隣のE8－4－37区（報告書未刊行）で7世紀後半～８世紀初頭の掘立柱建物十数棟、総柱建物２棟、井戸等が確認されている。また、調査地より南のE9－2－35区（報告書未刊行）で鎌倉時代の鋳造関連遺物が廃棄された土坑や掘立柱建物など河内鋳物師に関係する遺構が確認されている。

図26　E8－4－37区掘建柱建物群（東から）

3　基本層序

第1a層は旧耕土で、灰色(N4/)粗砂～細礫混じり砂質シルト。下部に薄く砂が集積する。明治16年の丹南村全圖での地目は水田である。第1b層は1a層の床土で、上半に層状班鉄が見られる。土師器、製塩土器(5)、平瓦(10)等の遺物片を含む黄褐色(10YR5/6)わずかに極粗砂～細礫質シルト。

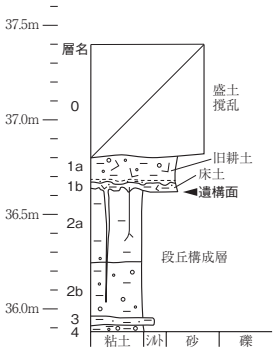


図27　柱状図　1：40

第2a層は段丘構成層で、上面が遺構面である。乾痕が多く見られる黄褐色(2.5Y5/3)又は黄橙色(10YR7/6)シルトで、乾痕が黄灰色シルト(2.5Y6/1)。第2b層は5～30㎜大の風化礫を多く含む灰白色(5Y7/2)砂質シルト。

第３層は黄灰色(2.5Y4/1)シルト。第４層は第2b層と同じ色調であるがやや砂を多く含む層である。

4　検出遺構（図29～38）

今回の調査は、遺構面である第２層上面まで機械で掘削し遺構検出を実施した。しかし、上層での耕作による斑鉄や擾乱、乾痕により輪郭の把握が困難であったため、第２a層を更に掘り下げ遺構を検出した。また、調

図28　E8－4－47区調査区全景（東から）

査区北東側は撹乱が深い傾向にあった。最終的に検出した遺構は、土坑が７基、柱穴及びピットが47基である。

図29　E8－４－47区完掘状況（北西から）

塀１　東西方向の掘立柱塀。柱穴５基を検出し、主軸がN－81.6°－W、柱間寸法2.32±0.18mである。柱穴の平面形は辺長62～104cmの方形で、柱穴11が最も大きい。柱痕径は20cm程度。47柱穴が塀１の主軸延長より南にずれるため、11柱穴を塀の西端とした。９柱穴の柱痕より須恵器甕の体部(6)、他の柱穴から器種不明の土師器と須恵器杯が出土しているが、細片で時期を推定し難い。柱穴７・10より埴輪と思われる破片が出土し、１点は突帯を有する(7)。なお、８柱穴に切られる30柱穴には遺物が含まれていない。飛鳥～奈良時代と考えられる。

掘立柱建物１　南北１間（平均1.20m）×東西３間（平均2.43m）の掘立柱建物。柱穴の平面形は直径24～32cm（平均27cm）の円形で、柱痕の径は約12cmである。23柱穴より丸瓦(9)と土師器の細片が出土している。帰属時期は古代～中世と考えられるが、それより時期を絞り込むことは困難である。

46土坑　調査区北西端で検出された奈良時代の土坑。規模は南北1.5m以上×東西1.1m以上、深さ0.3mで、埋土に炭化物を含むが出土遺物に被熱痕は認められない。最上層（図38の１層）より高杯などの土師器(3・4・8)が出土している。また、口縁部にかえりを有しない須恵器杯B蓋と製塩土器の細片が出土している。

5　出土遺物

遺物の量はコンテナ１箱である。包含層出土の１は土師器杯、２は皿Aでどちらも内面の暗文を欠く。

３は土師器高杯Aで、皿形の杯部は口径26.4cmで外面ケズリ、内面放射状暗文。４は土師器皿Cで、口縁に油煙と思われる黒色物質が付着し、灯明皿と考えられる。

７は埴輪と考えられる。土師質で突帯と透孔を有する。体部外面は縦ハケ、内面は強い横ナデ。

８は土師器竈で、外面ユビオサエのちナデ。体部の孔に把手を差し込み粘土を貼付けて補強した痕跡が残る。

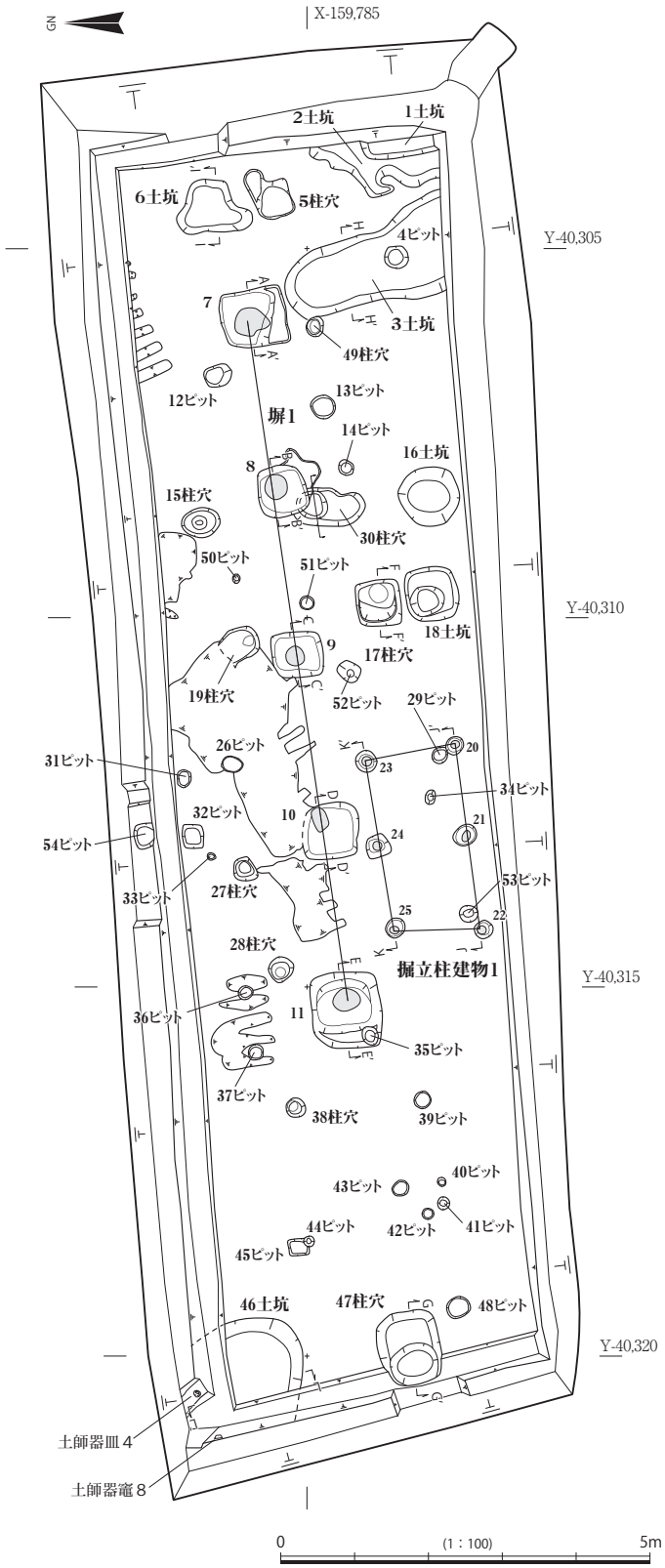
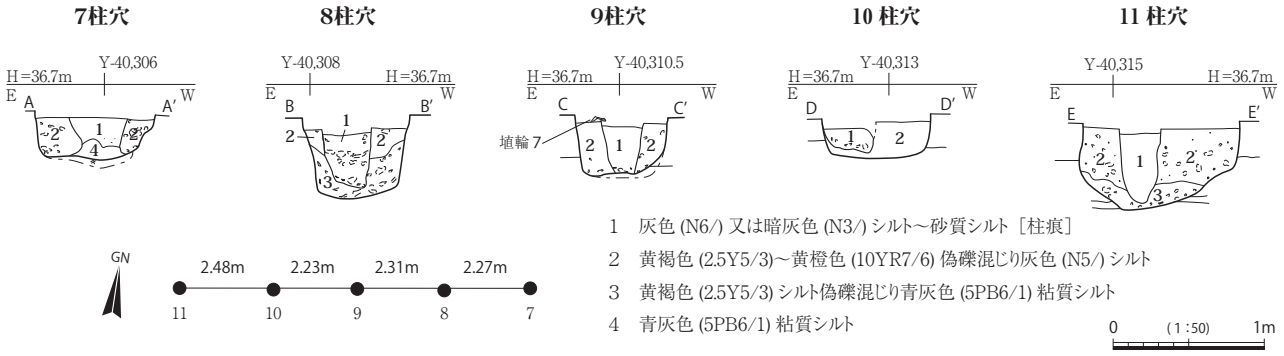


図30　E8－４－47区遺構平面図　１：100



1　灰色 (N6/) 又は暗灰色 (N3/) シルト～砂質シルト［柱痕］
2　黄褐色 (2.5Y5/3)～黄橙色 (10YR7/6) 偽礫混じり灰色 (N5/) シルト
3　黄褐色 (2.5Y5/3) シルト偽礫混じり青灰色 (5PB6/1) 粘質シルト
4　青灰色 (5PB6/1) 粘質シルト

0　(1：50)　1m

図31　塀１柱穴断面図　１：50

図32　塀１及び掘立柱建物１（北から）

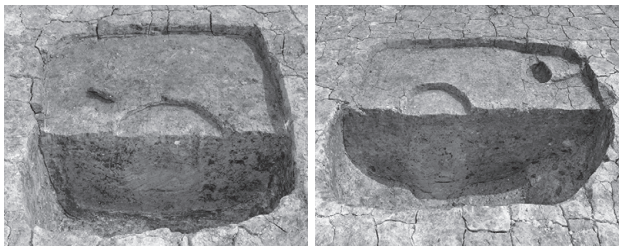
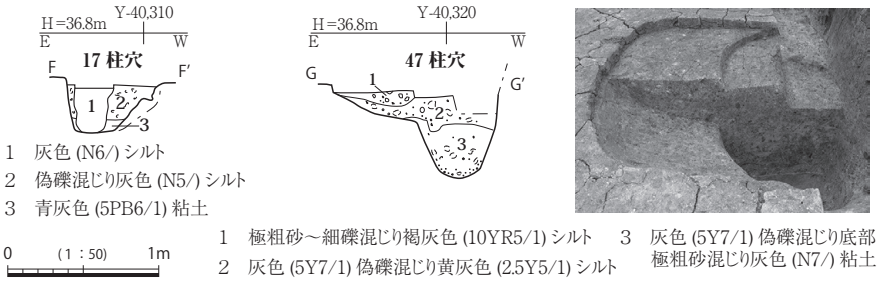


図33　塀１柱穴（左：9柱穴、右：11柱穴）断面（北から）

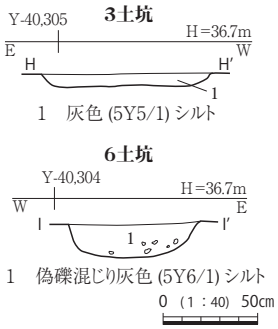


1　灰色 (N6/) シルト
2　偽礫混じり灰色 (N5/) シルト
3　青灰色 (5PB6/1) 粘土

1　極粗砂～細礫混じり褐灰色 (10YR5/1) シルト
2　灰色 (5Y7/1) 偽礫混じり黄灰色 (2.5Y5/1) シルト
3　灰色 (5Y7/1) 偽礫混じり底部極粗砂混じり灰色 (N7/) 粘土

0　(1：50)　1m

図34　17柱穴断面図・47柱穴断面図及び断面写真（北から）　１：50

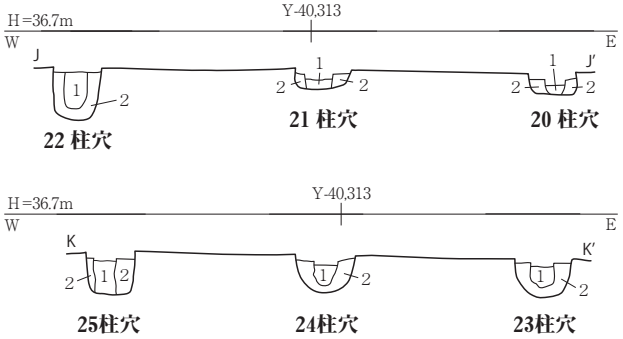


1　灰色 (5Y5/1) シルト

1　偽礫混じり灰色 (5Y6/1) シルト

0　(1：40)　50cm

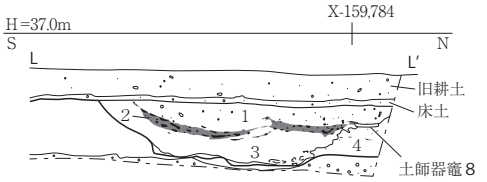
図35　３・６土坑断面図　１：40



1　灰色 (N5/) シルト［柱痕］
2　灰色 (7.5Y5/1) わずかに極粗砂混じりシルト

0　(1：40)　1m

図36　掘立柱建物１柱穴断面図　１：40



1　炭化物粒を少量含む灰色 (5Y5/1) わずかに細礫混じりシルト
2　炭化物粒を含む黒色 (2.5Y2/1) 粘土
3　黒褐色 (5YR2/1) 粘土偽礫混じり黒褐色 (2.5Y3/1) 粘土
4　炭化物粒を少量含む黒褐色 (5YR2/1) 粘土

0　(1：40)　1m

図38　46土坑断面図　１：40

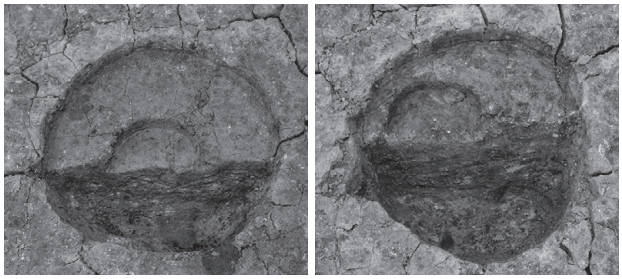


図37　掘立柱建物１（左：23柱穴、右：25柱穴）断面（南から）

図39　46土坑（南東から）

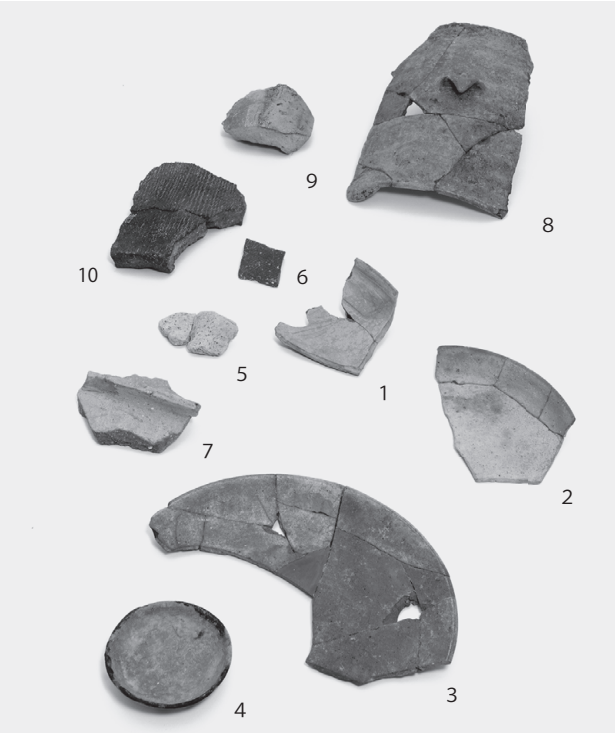
6　総括

今回の調査では、飛鳥～奈良時代と考えられる塀と奈良時代の土坑を確認することができた。これらは東隣のE8－４－37区で検出された７世紀後半～８世紀初頭の正方位の掘立柱建物群と一体のものと考えられる。また、調査地より南西約200m（N34°33′27″E135°33′34″付近）のE9－２－18区では奈良～鎌倉時代の掘立柱建物跡が10棟以上検出されている。建物跡には奈良時代の総柱建物もあり、調査地を含む一帯に古代の丹南を拠点とした氏族の居館又は官衙が存在した可能性は非常に高い。

なお、丹南遺跡では今回の調査を含め埴輪の破片が出土する事例があり、E9－２－18区では古道の側溝より土管に転用された円筒埴輪が出土している。古代の土地開発により削平された古墳が存在したと考えられる。

参考文献

岡本武司 2011「南河内における古代道路-古代丹比地域における古代道路の復元-」『大阪府立狭山池博物館研究報告』7
松原市教育委員会 2003『松原市文化財情報誌 たじひのだより』2



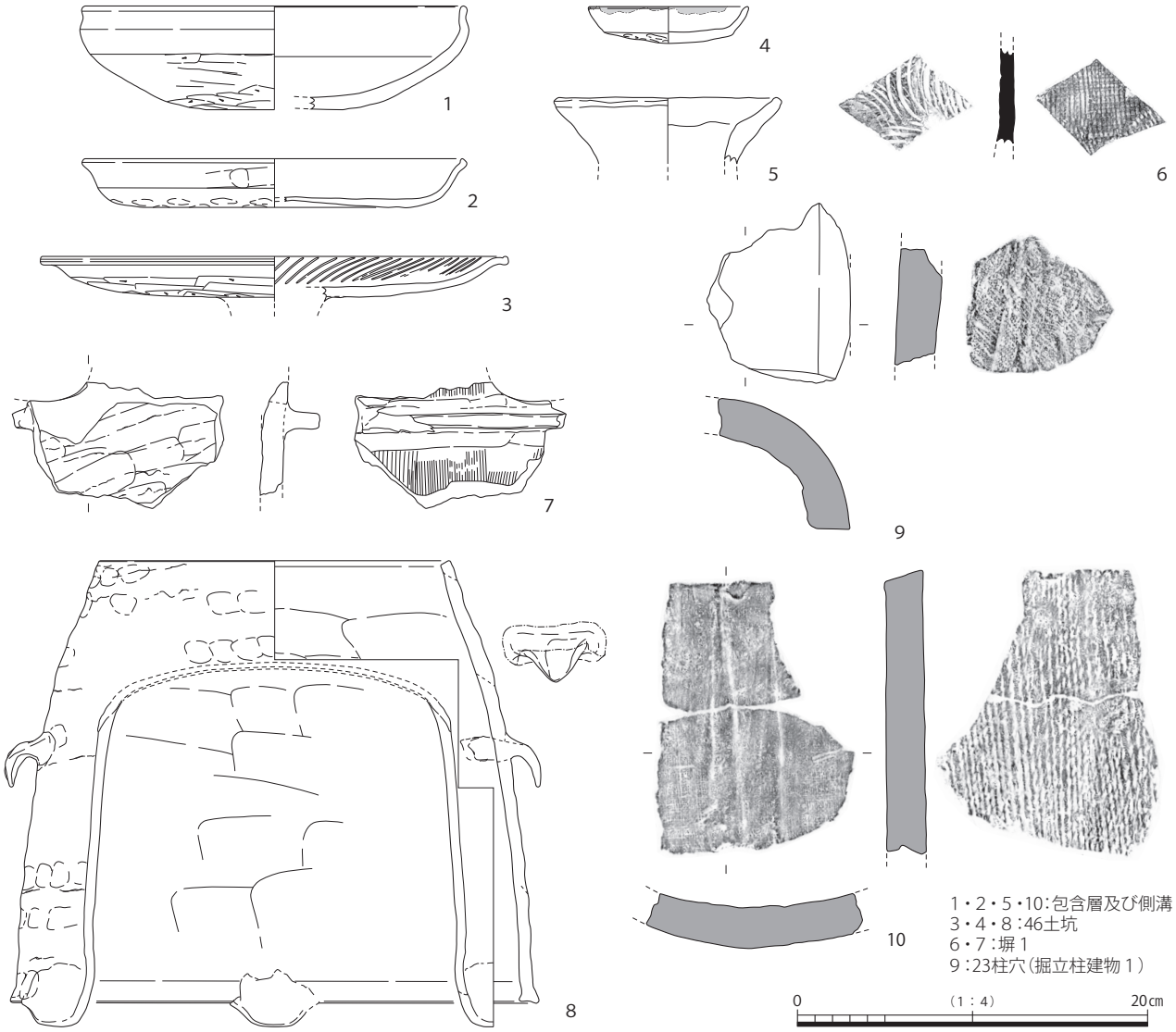


図40　E8ー４ー47区出土遺物　１：４

布忍遺跡 C5－3－58区

1　調査に至る経緯と経過

本調査は、スギホールディングス株式会社により、店舗建築が計画されたことによる。平成29年11月8日付で発掘の届出が提出され、平成29年11月20日に店舗建築部分を対象として確認調査を実施したところ、一部で遺構を確認した。このため、事業者と協議を行い、埋蔵文化財が影響を受ける範囲（25㎡）について平成29年12月18日～12月20日まで記録保存目的の発掘調査を実施した。

2　位置と環境

布忍遺跡は、弥生時代～近世の集落跡・社寺跡として周知されている。近隣では、本調査地から北東約250mの地点で、西除川改修事業に伴い、大阪府教育委員会による発掘調査が実施され、中世～近世の自然河川や近世以降の井戸等が確認されている。

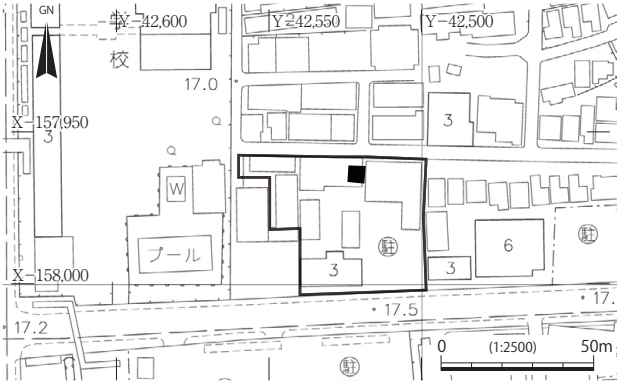


図41　調査区配置図　1：2500

3　基本層序

基本層序は、図42のとおりで、遺構検出面は標高約16.15mである。なお、遺構面は、近代以降の撹乱の影響を受けていた。

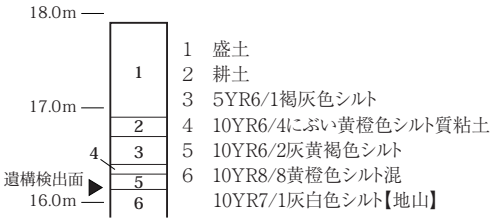


図42　基本土層柱状模式図　1：80

4　検出遺構（図43・44）

1溝　幅約0.3～0.6m、検出長1.5m、深さ約0.1～0.2mの溝である。埋土は、黒褐色シルト質粘土であった。出土遺物は認められなかった。

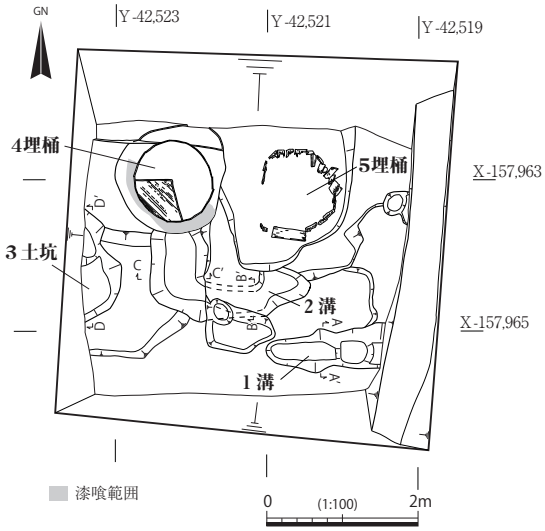


図43　C5-3-58区遺構平面図　1：100

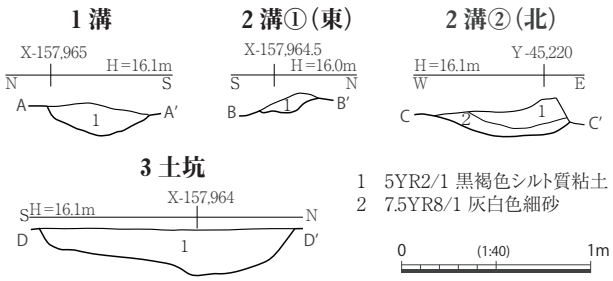


図44　1溝・2溝・3土坑断面図　1：40

2溝　L字に曲がる溝で、幅0.4～0.7m、検出長約2.5m、深さ0.1～0.2mをはかる溝である。埋土は、黒褐色シルト質粘土及び灰白色細砂であった。遺構の北端部は4埋桶・5埋桶によって切られている。出土遺物は認められなかった。

3土坑　検出長軸1.5m、検出短軸0.6m、深さ0.2mの土坑である。埋土は、黒褐色シルト質粘土であった。出土遺物は認められなかった。

4埋桶・5埋桶　出土遺物より近代以降の所産である。

5　総括

今回の調査では、土坑や溝など布忍遺跡の様相を検討するための資料を得ることができた。出土遺物は認められなかったが、これらの遺構は周辺のC5－3－13区の確認調査成果等から、中世以前の所産とみられる。当遺跡の本発掘調査は今回が第一次であり、今後、周辺での調査事例の増加が待たれる。

参考文献

大阪府教育委員会 1987『大津道遺跡発掘調査概要』
大阪府教育委員会 1988『大津道遺跡発掘調査概要·Ⅱ』
松原市教育委員会 1981『松原市遺跡発掘調査概要 昭和62年度』

図45　調査区全景（東から）

図46　1溝断面（西から）

報告書抄録

ふりがな	まつばらしないいせきぐん
書　　名	松原市内遺跡群１
副書名１	民間開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名２	岡遺跡E7－４－83区　丹南遺跡E8－４－47区　布忍遺跡 C5－３－58区
シリーズ名	松原市文化財報告
シリーズ番号	第３冊
編著者名	大矢 祐司、樫木 規秀
編集機関	松原市教育委員会
所　在　地	〒580－8501 大阪府松原市阿保１－１－１　TEL 072－334－1550　FAX 072－332－8550
発行年月日	平成31年(2019)３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯	東　経	発掘期間	調査面積	発掘原因
おかいせき 岡遺跡	おおさかふ 大阪府 まつばらしおか 松原市岡３丁目、 しばがき 柴垣１丁目	27217	38	34° 33′ 58″	135° 33′ 32″	20180409 ～ 20180515	246㎡	宅地造成 に伴う 記録保存調査
たんなんいせき 丹南遺跡	おおさかふ 大阪府 まつばらしたんなん 松原市丹南４丁目	27217	41	34° 33′ 31″	135° 33′ 38″	20180509 ～ 20180523	100㎡	宅地造成 に伴う 記録保存調査
ぬのせいせき 布忍遺跡	おおさかふ 大阪府 まつばらしみなみしんまち 松原市南新町１丁目	27217	12	34° 34′ 30″	135° 32′ 11″	20171218 ～ 20171220	25㎡	店舗建設 に伴う 記録保存調査

収録遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岡遺跡	集落	弥生時代～中世	溝、井戸、落ち込み、河道	弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、木器、炉壁片	集落の一部とみられる溝・土坑・井戸を検出。また、確認した谷状地形内で、落ち込みや河道を検出。
丹南遺跡	集落	古代～中世	掘立柱建物、掘立柱塀、土坑	土師器、須恵器、製塩土器、埴輪、瓦	埋土に埴輪や須恵器甕などの破片を含む古代の掘立柱塀を検出。土坑より奈良時代の土師器竈と灯明皿が出土。
布忍遺跡	集落	中世～近代	溝、土坑、埋桶	なし	

要　約	岡遺跡　奈良時代～平安時代及び中世の集落の一部を確認。 丹南遺跡　古代の掘立柱塀や土坑などを検出。東隣で古代の建物群が検出されており、一帯に氏族の居館や官衙が存在した可能性が高い。 布忍遺跡　中世以前の集落に関わるとみられる溝・土坑を検出。

松原市文化財報告第３冊
松原市内遺跡群１
民間開発事業に伴う発掘調査報告

【編 集 発 行】松原市教育委員会
【発　行　日】2019年３月31日
【印　　刷】株式会社近畿印刷センター